

創業の心「和」の精神が、 百年受け継がれて来た。

まもなく創業百年・創立70周年を迎える

石塚建設興業株式会社

本社／稚内市

石塚DNA

それは「和」の

精神

北海道新聞（主に道北版）、日刊宗谷、稚内プレスの3紙に、この会社の名前が掲載されない年は皆無でしょう。例えばそれは何かの表彰式や地域貢献に関するニュース。あるいはボランティア活動や寄付であったり。最近では新分野進出の事業計画や技術の話。しかし、当地方在住者であれば最も目にするのが「トップは石塚建設」という見出しの高額所得法人（稚内税務署公示）に関する記事かも知れません。

石塚建設興業株の三代目石塚宗博社長（現会長）、そして四代目石塚英資社長にお会いした印象は「本当に

無理な成長を 追うな

◆同社の平成に入ってから完成工事高は、年平均で60億円を少し超えるところ。最も多かった年で80億円を超えています。しかし100億円企業を目指すことをしませんでした。会長「最初に80億円を超えたのは平成6年度でした。当時の社内上層部はみな志気も高揚し、百億円を目指そう」というムードになりました」

社長「会議の席で話題になったことを私も覚えてます。あの時にセーブしておいて、本当に良かったと思っています」

会長「100億円を目標に掲げていたら、いま頃は大変なことになっていただいでしょうね。事業を拡大し売上が伸び続けているうちは良いとしても、いずれ落ちる時が必ず来ます」
社長「当時すでに低成長期に入っていました。公共事業も減り始め、まもなく大変な時代が来るという予測

建設会社なのだろうか？」と思うほどに紳士然としているのです。物腰の柔らかさ、丁寧な言葉遣い、頭脳明晰な話し方、どれをとってもビルを建てたりトンネルを掘ったりする感じがなく、むしろ経済人といった

趣き。しかも驚くほど、お二人とも記憶力が抜群なのです。社歴を伺っても創業当時から続く話を連綿とされ、両者同じ軸足に立って話をされているのがとても良く分かりました。話を伺うにつれ、実感することがありました。オーナー経営は、ともするとワンマン経営に陥りやすい傾向にあると指摘されますが、同社では経営者の考え方が一つの方針として、全社員に浸透しているのではな

いか。経営理念や会社の歩んできた道のり、地域社会に果たさなければならぬ使命感などを、社員一人ひとりが深く胸に刻んでいるように感じられるのです。

そんな石塚建設興業では、十年単位で会社の歩みを記録した記念誌を発行しています。そしてその冒頭には、必ずといって良いほど、ある一つの言葉が登場します。それは「創業者の心」と題された、雅号 静風（二代目・石塚宗平氏）による「和」という書です。

どうやらその和という一字に込められた精神が、石塚DNAに宿っているようなのです。その石塚DNAである「和」を紐解いてみましょう。

を立てていました。ですから無理な成長を追わない、そういう会社のモデルを考えたいのです。リストラもしたくありませんし、取引先を代えないことも当社の方針です」

会長「多少売上が落ちたとしても、長く堅実に仕事をしているうちに、有り難いことに当社を必要としてくれる会社が現れるものです。恵まれていると思います。例えばこれまでミサワホームさんのフリープランの高級住宅やレオパレスさんのオーナースマンションの建設、自社の不動産の仕事など、公共事業に頼るだけでなく多角的な経営を続けてきたから今日があるのだと思います」

社長「当社の場合、総合建設業としての公共事業の割合は比較的40%ほどとなっています。全体では建築が60%、土木20%、残りが電気、管などの設備工事、不動産というバランスになっています。おかげさまで札幌本店も順調ですし、この10年で開拓してきたニセコリゾートに関する建築も、すべて与信の確かな仕事として推移しています」

◆急成長ではなく「真面目に着実に、そして誠実に仕事をするのが大事」であると、お二人とも口を揃えます。石塚建設興業は売上が伸びれば「それでよし」とする会社ではありません。そもそも地域の中で自社さえ良ければという発想すらしていません。毎年事業計画に基づき、完成工事高

を50〜60億円の間で置き、その中でいかに高品質な仕事を残せるか、社員のやり甲斐を引き出せるか、そして業界の悪しき慣習であった取引先泣かせ、大工さんイジメをしない、極めて和を重んじる会社であることが分かりました。

石塚建設興業株式会社

代表取締役社長 石塚 英資 氏

昭和35年9月28日
北海道稚内市生まれ
四代目



我が子を愛するよう 郷土を愛せ

◆逆境に打ち勝つ力は、どんな時代でも自分自身で培ってきたのが同社の逞しいところ。歴史は繰り返す。その言葉通り、初代から二代目、三代目、四代目へと継承されていく過程は、一度たりとも順風満帆とは言えません。しかしそれぞれの知恵で荒波を乗り越え、社長の交代劇を演じてきました。親子から子へ引き継がれたものは事業や親子愛だけでなく、郷土愛もDNAとして遺伝していったのです。

社長「私は子どもの頃、父の姿をほとんど見ることなく育ちました。とにかく朝から晩まで仕事で家にはいないのです。むしろ祖父の記憶の方があ

石塚建設興業株の近年の施工例



稚内市廃棄物最終処分場建設工事



バリアフリー対応旅客施設建設工事（利尻富士町）



稚内空港駐車場舗道ルーフ新築工事



LIM駅新築工事（ニセコ町）



宗谷岬ウィンドファーム建設工事

昭和59年室蘭工業大学工学部土木工学科卒業。同年、北海道網走土木現業所に入所。平成2年道庁を退職し、石塚建設興業株に入社。平成9年専務取締役。平成17年同社代表取締役社長に就任。

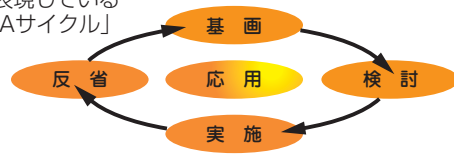
豊富町定住支援センター新築工事 豊富町定住支援センター（撮影：酒井 広司 氏）



昭和7年10月18日
新潟県佐渡市宿根木生まれ
三代目

石塚建設興業株式会社

代表取締役会長 石塚 宗博 氏



※ 仕事の手順を表現している社訓の「PDCAサイクル」

な大工小屋がありまして、そこに落ちていた新品の釘を拾い集めて祖父に渡すと、ニコリと笑ってラーメンを食べさせてくれたり。中学生から札幌に出してもらいましたが、先代までの苦労を何一つ知りませんでした」

会長「私とて同じなのです。そのために親がどれほど苦労したかは、自分が親になって初めて知ることです」

社長「社長になってみて、初めて自分の能力の無さに気がつきました。初めの1回や2回の赤字であれば周りも『石塚は代わったばかりだ、仕方がない』で済むでしょうが、6年の赤字は許されるものではありません。先代までが築き上げてきた内部留保を私の代で大幅に取り崩してしまつて。おかげさまで、ようやく平成24年度からは3期連続で黒字を出せるようになったところでです」

会長「私は卒業と同時に入社しましたが、実は就職先はすでに決まっています、川崎重工工業(株)さんから内定をいただいていたのです。結果的に先代の『帰ってきなさい』の言葉に負け戻りましたが、いざ入社してみると驚きを超え愕然としてしまいました。大学では工業簿記も習っていましたので、当社の帳簿を開いてみると：なんと当時の金額で2,400万円もの不良債権を持っていたのです。私はそれを7年かけてキレイにしました。それでも入社して初めて

いや社外活動的な話ではありませんが、家族愛、地域愛の中にも石塚DNA「和」の精神の「原点」を見ている思いです。

船大工魂と応用力が生きている

◆さて、そろそろ石塚建設興業のルーツに迫らなければなりません。実は創業者石塚慶蔵氏も創立者の二代目石塚宗平氏も船大工だったのです。

会長「私も生まれたのは、当時小木町と呼ばれた小木港の入江に広がる宿根木です。そこは『千石船の里』、あるいは『船大工の里』と呼ばれ、江戸時代の古くから相川産の金と北前船で栄えた集落です」

- 建設業許可番号 北海道知事許可 (特-25) 宗第804号
- 社員：67名 (2015.7.1 現在)
- 営業種目
 - ①土木建築工事の請負及びその他各種工事請負業
 - ②管工事、電気工事の設計・施工
 - ③土木建築工事の設計、設備、監理及び管理に関する事業
 - ④不動産業
 - ⑤前各号に附帯する一切の事業



郷土の豊かな未来を築く…
石塚建設興業株式会社
 http://www.ishiken-cs.co.jp/
 本社：稚内市潮見1丁目9番15号
 TEL.0162-33-4956
 FAX.0162-32-7428
 ●創業：大正5年
 ●創立：昭和20年10月12日 石塚造船所
 ●会社設立：昭和38年12月24日 石塚建設興業株式会社
 ●資本金：(平成5年) 7,000万円

つくった損益計算書や貸借対照表の作成は、以後私の仕事となり、そのことが年毎に事業目標を立てるのに大いに役立っているのです」

社長「いま振り返ってみると、赤字になるのには、それなりの理由があったからなのです。当社では昭和20年代にすでにPDCA*サイクルを社訓として導入しているというのに、それを私がきちんと応用していませんでした。マイナスを計上しても会長は文句一つ言いませんでしたが、当時その原因を指摘されたとしても自分からなかったと思います。やっぱり自分で痛い目に遭わないと人間は気づきません」

◆創業の心として「和」をしたためたのは石塚建設興業の創立者、二代目石塚宗平氏でした。先代を助けるため進学はあきらめたものの、早稲田大学の講義録に学ぶほど向学心に燃え、常に学ぶことを修行とし、豊富な知識と教養を身につけた人だったそうです。そんな経験から、子どもの教育には惜しみなくお金を出したとのこと。また、大変良く人の面倒をみる人格者でもありました。そのような人物ですから学校や地域社会にも大きな役割を果たし、我が子に限らず親戚の子どもたちの面倒も良く見、身近において育てた子どもは五指に余るそうです。

地域の教育の底上げを願う心も代々受け継がれ、むしろ先代の薫陶を受けた

社長「つまり当社は船大工が始めた造船所からスタートしたのです」

会長「創業者は北前船関係の仕事をしていました。おそらく数名の船大工を連れて船を修理して回ったのではないのでしょうか。しかし、北前船の寄港地として発展してきた小木港も、明治維新後の全国的な鉄道網の完成や大型汽船の登場、さらに決定打となった明治18年に出された『五百石以上の和船建造禁止令』によって一気に北前船が衰退しました」

社長「それでニシン漁場と北洋漁業に湧く北海道へ移住するのです」

会長「明治の終わり頃、義弟を伴い宗谷や樺太を視察した創業者は、大正2年、息子の宗平氏とともに宗谷村利矢古丹(リヤコタン/現富磯)に来て、漁船の製作を開始するので、その後は仕事のない冬期間だけ宿根木に帰る生活を繰り返して、意を決し、大正4年に利矢古丹に造船所を建て、翌年には家族も移住を果たしました。それが当社のルーツです」

社長「評判の良い船で、利尻・礼文島にも発注者がいたようです」

会長「初代は親戚から5名ほど選りすぐった船大工を伴い、北前船の技術を応用し磯舟や保津(ほつ／ほづ)と呼ばれる鯨漁のための和船をつくり、時化でも安定感のある評判の良い船をつくったそうです」

い船をつくったそうです」

◆つまり、石塚建設興業の始まりは造船業だったのです。初代は漁業にも取り組みましたが、建設業へシフトしたのは二代目になってからのことでした。

13歳で船大工の棟梁に弟子入りした初代も、中学進学を断念した二代目も厳しい修業に耐え、一人前の棟梁となっていたのでしよう。だからこそ「半端なものをつくつたら、ただじゃおかない」「おかしなものをつくつたら、ご先祖様に申し訳ない」という船大工としての職人文化が息づいたのでしょう。

そういう職人魂も一度、稚内で大きな危機を迎えています。それはまるで宿根木で北前船の造船ができたくなつたかのように、やがて鯨が獲れなくなつてしまふ造船の注文もピタリと止まってしまうこと。しかし、郷里から志を同じくし一心同体となつてやって来た船大工たちをクビにすることはありませんでした。彼ら船大工の技術と能力を家づくりに応用したのでした。

このように元船大工の職人たちが宗谷地方を中心にやがて公共事業、ビル建築、土木工事を請け負うようになるまでそう時間はかかりませんでした。そうして石塚造船所は昭和



明治33年8月21日～昭和44年2月9日
 慶応3年9月15日～昭和20年2月10日

二代目 創立者 石塚 宗平 氏 (造船業から建設業へ転換)
 初代 創業者 石塚 慶蔵 氏 (船大工として造船所建設)

けながら、世代交代を果す中でより一層、隣人愛、地域愛、郷土愛を深めていったと言えるでしょう。

これまで、例えばPTA役員をはじめ地域のスポーツ振興、社会教育に関する多くの公職に就き、グラウンドの緑化運動、整備事業、遊具の設置などにも尽力され、時には善意を寄せてきました。社会福祉面でのボランティア活動も光り、業界をリードする要職と合わせると、それを書くだけで誌面が埋まってしまうほどのです。

どうやらそのような役割は、初代創業者、石塚慶蔵氏の時代から当地で与えられていたかのようです。現在の新潟県佐渡市宿根木から稚内市富磯に移住した早々、村の有志者に頼まれ神社を建立し、竜王堂も建て宗谷の海の守護神を祀りました。



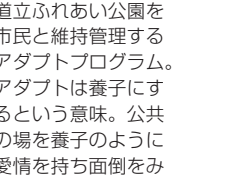
北門神社境内の草刈り清掃活動と終了後の記念撮影



道立ふれあい公園清掃活動

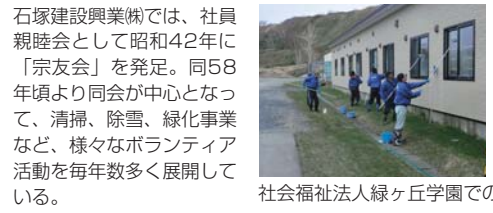


道立ふれあい公園清掃活動



道立ふれあい公園清掃活動

そればかりか祝詞を奏上することができたため、一家は神社のお守りをするようになったそうです。また、小学校の校舎建設に尽力し、半鐘を櫓に納め寄進しています。地域の安全と学校と子どもを守るため、鐘を火災や洪水など非常時に備えました。移住するや、たちまち漁師や村人にとって「心のよりどころ」となつていったのは想像に難くないでしょう。



社会福祉法人緑ヶ丘学園での清掃ボランティアや除雪



社会福祉法人緑ヶ丘学園での清掃ボランティアや除雪



「ふれあい土木教室」を支援

26年に「石塚造船建設所」へ。初めて社名に「建設」の二文字が登場するので。さらに同38年暮れに組織を法人化し「石塚建設興業株式会社」となつたのでした。それを契機に民間の船の建造は取り止め、事実上、造船事業は終焉を迎えるのでした。

船でも建設でも欠かせない木。その木の年輪は、幅が狭くなるほど強く、逆に広いところほど弱いそうで、急成長ほど脆くなりやすいということを暗示しています。強風にも揺るがない強い木であり続けるためにも緻密な年輪の輪を重ね、これからも社員とその家族、取引先、業界、地域社会の「和」の中心として活躍し続けることでしょう。

私と信金 石塚 宗博 氏

当社と同じ昭和20年生まれの子供(稚内信用金庫)です。昔から本店は自分の家のような感覚で行っておりまして。昭和32年4月に入社した私は6月早々、父に連れられ御挨拶に伺いましたが、その時初めてお会いしたのが、昨年ご逝去された井須(のちに理事長・会長・最高顧問)さんでした。以来、懇意にさせて頂き、家族同然のおつきあいが始まりまして。また会社も金庫一本でここまで来ました。仕事でもこれまでに多くの店舗などの建設、メンテナンス業務を頂いております。当社が今日こうしてあるのも金庫のおかげだと思っております。